

經濟者としての農民

東 畑 精 一

一 經濟主體への關心

統制經濟政策の遂行のために日本經濟の諸々の部面や構造の一角が變化せしめられつゝある。また進みては日本が今日もつてゐる課題を最も巧みに且つ能率的に實踐するためには更に幾多の變化を今日の經濟生活に加へねばならぬ。よかれあしかれ之れが今日の實狀であつて、之れを日本經濟再編成のための惱みと呼び得るであらう。

斯かる見地のもとに幾多の検討が日本經濟の構造、構成要素等に對して行はれつゝあるのは讀者のすでに十分に知られるが如くである。この場合に検討さるべき對象はほど二つの範疇に大別できるであらう。一つは云ふ迄もなく經濟の行はれ營まれる客體とも呼び得られるものに就いてであつて、例へば資源、石炭、米、輸出力、工場設備、輸送能力の如きに就いて通例行はれてゐるものである。斯かる客體の検討に關しては今迄最も廣く且つ集中的に行はれることが強かつたと思ふ。之れに對して經濟を營むもの——それは單純に一自然人に限らず或ひは團體にも法人にも適用せられる云ひ方である——即ち茲に云ふ「經濟者」經濟の主體に就いての検討は比較的薄弱であつたと思ふ。ひ

とびとが如何なる風に其の經濟生活、經濟活動を營んでゐるか、それは如何なる性質のものであるか、自治統制を營むものは如何に其の統制を實行してゐるかの問題は、然し、客體の検討にも劣らず重要を附せられるべきものである。元來斯かる主體の検討なくして客體のみの検討が行ひ得られるものではない。一見したところ主體の検討がわざわざ爲されてゐなかつたのは、之れを無視、等閑視したのに基かないで、實際のところは客體の検討に際して既存の一定の主體——即ち主體の經濟者としての動き方、はたらし工合等——を既に與へられたもの、既知條件として豫定してゐるに過ぎなかつたと見るべきであらう。しかし今日の實際から見ると統制經濟政策が既存、既定の經濟主體の在り方を豫定して置いて、其の限度内で單純に經濟の操縦、變更をなすことによつて完きを得る段階は既に過ぎ去つたと云ひ得るであらう。今日の主要な問題は寧ろ此の主體の經濟社會に於ける在り方自體に對しての検討にあると云つても過言ではない。經濟の問題として倫理を説くのは正に此の既存の主體の在り方の變更を説くことに外ならないし、プール平準價格制を實行せんとするのも正に同様の目的のもとに多數の同類生産者の在り方に對して變更を加へんが爲めであらう。

如何なる在り方が目標とせらるべきかは到底ここで論議せらるべきではない。政策論は兎も角として現實の事實は如何であるか。それは如何に觀察せらるべきであらうか。また斯様な視角から、日本の經濟の全體の中に於て特殊なる地位をもつと思はれる農民に就いて其の主體としての性格の一端を窺つてみたい。

二 代表的生産者の概念

何時の時代をとつても何處に行つても、われわれの四周には全く多數、多種の經濟者が働らいてゐる。その各々の營む仕事が異つてゐる許りではなくして、各々の働き振りが異つてゐる。働きの仕方が異つてゐる。營々と働くもの、夜働くもの、素手で働くもの、機械と共に働くもの、他人の上に立ちて働くもの等々數へるに限りなく存すると云はねばならぬ。この多種多數のものをわれわれは經濟學徒として一々記録し其の各々の性格を記述することは到底出来るものではなく、又其の必要もない。何等かの形で之れを簡單化し統一的な把握をなさねばならない。

今日までの經濟學の研究——殊に正統學派——に於て此の問題は如何に取扱はれてゐたであらうか。あらゆる社會哲學や社會科學がそれぞれ人間性に就いて一定の性格を前提して其の上に建てられてゐるのと同様に——例へばホッブズに於ては「人と人とは狼の關係である」——わが經濟學に於ても亦此の多數の經濟者に對して一定の假定を設けて彼等の經濟活動を統一的に理解しようとした。しかも夫れは一元的な假定であつて、いはゆる「經濟人」(Homo economicus)と總稱せられてゐるものが之れが典型であつた。そして夫れ以外の型に於ては人間の經濟活動を捉へなかつたのである。

斯かる假定に於ては次の點が注意せられるであらう、即ちあらゆる經濟者は若しも「經濟人」として觀られる限りは夫々一定の條件の下で一定の合理的活動をなし一定の變化に對しては一定の合理的適應をなすものとして理解せられる。たとへ指物師と農夫、資本主と企業者、勞働者と地主と云ふ風に種々の經濟主體に分れて夫々異つてゐる機能(Function)を營んでゐても、夫れは單に技術的に乃至は視覺的にのみ異なるものに過ぎない。しかし抑々彼等が經濟者としての營みに當つて經濟的事物を合理的に處理する能力(Ability)に於ては、相互に均等的であり従つて代替的

であると云はねばならぬ、成程現實の事實としては事物處理の能力に異なるものがある場合があらう、けれども競争經濟の結果は總ては斯くの如きが消滅してゆくであらう、従つて正常的狀態の敘述、長期的な觀察に際しては、まさに上述した意味での「經濟人」こそ此の多種多數の經濟者の本來の姿であると云ふのである。——斯かるものを假りに「經濟者の平等能力」(Homogeneity of managerial ability)の假定と呼びた^(註)。

註 ある一つの事柄が萬人に共通であり平等に分散せられてゐる場合には、夫れは云はば既知數の範疇に屬するものとして敢て特別の問題として問はれる事が少いのを常とする。夫れは taken for granted のこととせられること例へば人々が意志力をもつとか手足をもつことが敢てわざわざ經濟事象の分析に於て問はれる必要のないのと趣が等しい。文獻考證を爲すことなくして概言するのは甚だ大膽ではあるが、正統學派を通じて經濟者の性格に關しての論議が甚だ乏しい所以は、茲に述べた萬人共通の平等能力の假定が置かれた瞬間に始まるのではないかと愚考する。

次に正統學派の學說の粹を集めたマーシャルの場合に就いて稍と詳しく問題を回顧して見た。マーシャルに於ては平等能力の假定にほど類似したものが意識的に且つ積極的に表面に浮び出でてゐる。それは彼れが正常的供給曲線、コストの分析の際に於て屢々用ひたところの有名なる「代表的企業」「代表的生産者」(Representative firm or producer)の概念である。それが用ひられてある若干の場合を擧げて其の内容を明かにしよう。

例へば或る生産物の生産總量に關聯して其の正常的費用の分析に際して、彼は其の總量に關して一人の「代表的生産者」の出費の研究を慈憑する^(イ)。然らば此の「代表的生産者」とは如何に概念せられた經濟者であらうか。夫れは、(イ)多くの不利を忍んで新しくビジネスに漸く這入り込み殆んど何等の利潤をも之れを得ないことに甘んじ、たゞ

將來の成功を確保する第一歩を踏み出でたことに満足するが如き、新生産者ではないのである。また(ロ)例外的に長き期間に互つて維持せられた能力や幸運によつて巨大なるビジネスを建て、其の競争相手に全く優越して秩序ある工場をもつてゐるが如きものを指すのではない。斯様なものは「代表的」ではなくて(ハ)やゝ長き間繼續し、可なり成功をなし、正常的能力(Normal ability)を以て經營せられ、當該生産業の生産總量に屬する内部經濟と外部經濟(Internal and external economies)に對して正常的な接近(Normal access)をもつてゐるが如き企業乃至生産者を云ふのである。斯かる生産者乃至企業は一産業に於て一般的にひろまつてゐる内部及び外部經濟の程度を見ることが出来る意味での特殊なる「平均的企業」(Average firm)に外ならぬ。

またマーシャルは屢々一産業の全體と其の個々の生産主體との關係を森と其の中の多くの樹木とに譬へた。森の全體は變らないが然し其の中にある樹木には生長してゆくものと枯死してゆくものとがあると云ふのである。また云ふ「あたかも一個人の歴史が人類の歴史と爲され得ないと同じやうに、個々の企業の運命をば一産業の歴史と爲すことが出来ない。しかも人類の歴史は諸々の個人の歴史の成果である。「同様にして」一つの一般的市場のために生産せられる總生産量は、或は「當該生産物を」増産し或は減産せしめるやうに導く「個々の生産者」の動機の成果に外ならぬ」と。さうして此の森、人類に相當すべき全體たる總生産量(一産業)を分析する鍵としてマーシャルの取上げたものが「代表的」なものであつて、「代表的企業」がそれである。若し彼が森、人類を知らんとせば恐らく此の場合に「代表的樹木」や「代表的個人」なる構想を以てしたであらうと云はねばならない。^(註)

45

註 生産費の分析に於てマーシャルの「代表的企業」の構想に重きを置いた中山伊知郎教授(『經濟學一般理論』一七七頁)が、
經濟者としての農民

特に消費の場合に「代表的消費者」を考へることは困難であると云ふのは、わたしの理解し難いところである。生産の場合でも消費の場合でも——敢て兩者の對稱的考察を問はなくとも——「代表的」を考へることは原理的に難易を等しくすると思ふ。

マーシャルの「代表的企業」なる概念の詳しい吟味や、其の經濟分析要具としての有効性等に就いては茲で之れ以上には觸れない。⁽³⁾ われわれの問題の見地から顧みて興味ふかい一點を擧示したのである。恚うである。即ち此の多數の然も種々雑多の經濟主體が——それは經濟社會の全體では云ふまでもなく、一産業の範圍をとつても云ひ得るところである——其の異質性に於て把持せられないで、一元的なものとして認識の中に持ち來たされた點である。敢て統計的とは云へないが何等かの「平均的」企業、「正常的」能力として觀念せられたことである。斯かる「代表的」と云ふ飾にかけられて全體と之れを構成する相異なる種々の個體とが調和せられたのである。われわれにもマーシャルにも最初の經驗として現れて來た經濟主體の雑多性は此の「代表的企業」なる認識用具によつて篩はれて終つて、再構成せられたマーシャルの經濟社會には今や「代表的企業」なる一元的なものが多數に存在するところとなつたのである。さうして一度び再構成せられた經濟社會はマーシャルによつて縦横に分析せられてあの大きな成果を擧げたのであつた。さうして重要なことはマーシャルに於ては——少くとも其の生産費の分析に於てであるが——「代表的企業」從つて「平均的能力」以外のものは再び何等の原理的な考慮をも拂はれずに悉く捨てられて一元的なものに統一せられたこと之れである。

(1) A. Marshall, Principles, 7th ed. 317—18.

(2) Ibid. p. 459.

(3) 「代表的企業」概念に就いて最も反響的なものとして例へば L. Robbins, Representative firm, in Economic Journal, Vol. 38 (1928) pp. 387-404 参照。ロビンスは此の概念を靜態分析に於て不用となし、進みて misleading であると爲すものである。

三 その由來と歸結

經濟者が斯くも多種多敷なるにも拘らず、經濟事物の分析に當つて其の平等能力、平均能力の假定の限度に於てのみ彼等が把握せられて、他が顧みられなかつたのは何故であらうか。思ふに夫處には特殊なる理由が存在したと思ふ。顯著なるものを示したい。

第一は思想的背景をもつものである。正統學派經濟學の出發點は云ふ迄もなく自然法の思想にある。それに於ては人間の平等の權利、人格の平等性が説かれた。フランス革命とデモクラシーが其の政治的表現であるとすれば「經濟人」「平等能力」の構想は其の經濟學的反映に外ならない。さうして經濟的事物の處理能力の平等が一度び探り上げられて經濟學の途が開かれた。思ふに最初の段階に於ては此の平等能力は云はば實在としての平等であつたであらう。人々は此の場合にアダム・スミスが説いた哲學者と運搬人夫との間の能力の原始的平等性を想起して見るべきである。後に經濟學の發達が例へばマーシャルに至つて此の平等能力は假定であり又分析要具の形態で取上げられたとは云へ、茲に一脈の聯絡を考へないわけには行かない。

47 第二は經濟上の自由競争の實狀に由來するものがある。十八、九世紀を通じて經濟社會は自由競争の成熟期であつ

た。茲に於ても三つの點から平等能力なる思想との關聯が認められる。一つは自由競争の激しさは劣等能力の經濟者を經濟社會から排除して了ふ、さうして殘留したいはゆる適者は結局のところ最早相互に排除せられ得ないものである。斯くて自由競争場裡に殘留したものの間に於て最早優者と敗者との能力の差等はあり得ないと云はねばならない。換言したならば長期的觀察をなしてあらゆる殘留せる經濟者を見るとき彼等は其の限りに於ける平等能力をもつものであると爲すことが出来る。二つには經濟者の職業移轉の自由である。前の場合は同一産業内の經濟者の平等能力の生誕し來れる過程であるが、この場合は夫れが全産業、全經濟社會内に於ける經濟者の平等能力の生誕を意味する。自由競争は平等能力を生産する。その限りに於て自由競争經濟を考察する認識用具としての平等能力の理論は最も有力なものと云はねばならない。三つには價格理論としての自由競争理論との關係に於て經濟者のもつ性格が反省せられる點がある。周知の如く一商品の自由競争價格の成立に關して個々の經濟者（その商品の生産者としてか或は需要者として）が有する影響力は正に微分量的なものであり、大海の一粟に譬へらるべきものであり、多數の經濟者の間に夫々の影響能力に差等が附せらるべき何等の機縁もないと云はねばならない。自由競争價格に關する限り之れ以上の立言を必要とせず、わざわざ經濟者の平等能力を云爲するのは價格理論としては正に無用の附加ではあらう。しかし論理的に云つて假りに此の場合に經濟者の能力として何物が描かれてゐるかと問ふならば正に平等能力が假定せられてゐると答へねばならないであらう。

第三には正統學派と云はずマーシャルと云はず、求められて來た經濟理論の性格に基く理由がある。求められてゐるものは今日の言葉で云へば均衡理論、靜態理論の範疇に屬すべきものであり、これを經濟の實狀に移せば靜止的循

環的狀態 (Stationary state) である。總ての經濟者がたゞ單純再生産の反覆を繰返してゐるところの云はば全面的靜止狀態 (Thorough-going s. s.) であるか、或は全體としては生産總量には何等の變化もなくとも其の内部の個々の生産者間には移動變移があるが、それは畢竟するにマーシャルの「代表的生産者」によつて十分に置換へ得らるべきものである限度の中での變化を認められてゐる靜止狀態にある。同一經濟活動、ルーチン・ワークを繰返す多數の經濟者がある時、われわれは之等の經濟者に能力の差等をわざわざ問ふ何等かの必要をもつであらうか。答、持たない。何故ならば、假令能力に差等があつても夫れをば靜止狀態の限りに於ては個々の經濟者が發揮する餘地がないからである。能力者も無能力者もめくら印を捺す限りに於ては平等であり、同一經濟過程を繰返す限りに於ては異なるものは多數者の機能そのものに過ぎなく其の能力にあるのではない。その限りに於て一步を進めて均衡理論が一元的に平等能力者を假定して經濟理論を建て、行く方法には何等の異論をも提起することは出来ない。優等地を耕作する無能なる農業者よりも劣等地を耕作してより大なる收穫を擧げてゐる有能なる農業者が屢々存在することは、平等能力の農業者と不平等の地力をもつ耕地とから差額地代の成立を説明する理論の可能と有効性とを毫も妨げるものではない。

x

x

x

然らば平等能力の假定はわれわれが經濟現象となすものを餘すところなく悉く説明し得るものであるか。この場合に殘されたる最も大なる問題は經濟發展の問題であらう。これに對しては右の假定は如何なる説明を加へてゆくか。

答は一見して簡單のやうであるけれども其の構造は左様ではない。

第一、先づ經濟發展の解釋に關する。特にマーシャルに關説して云ふならば、經濟發展は連續的性質のものである。

經濟者としての農民

彼の言葉を藉りるならば、夫れは「生物的」(Biological)なもので、例へば動物體や植物體の生長 (Growth) に比せらるべきものである。微量なる變化が漸次に累積した形で經濟變化が見られるのである。——然らば斯かる變化と經濟者の能力問題との關聯は如何であるか。一國の或る生産物の生産量の連續的な増減は、何れかの若しくは若干の經濟主體が其の生産設備を増減することによつて爲される。百臺の織機が百五臺に増されたと云ふが如くである。またある織機に漸次に若干の改良を加へることによつて其の生産量に若干の増加が可能ならしめると云ふが如くである。およそ斯かる限りに於ての經濟發展は、今迄考へて來た經濟主體の能力に特に特別な要因を加へることなくして優に可能なる事柄である。即ち經濟主體は在來のまゝの枠の中で考慮し行動してゐて可能な事柄であつて、毫も新範疇の考慮と行動とを其の經濟活動に要求せられるところがないのである。經濟の連續的、生物的變化(經濟生長)は斯くして「代表的生産者」なるマーシャルの認識要具によつても十分に説明され得る過程であらう。その限りに於て平等能力の假定に此の場合に何等の故障をも申し立てることが出来ないといふ爲し得るであらう。

さり乍ら經濟成長のみが經濟發展のすべての場面を盡すことが出来ない。茲に平等能力の假定が答を要求せられる第二の問題がある。

經濟發展の過程には成長的な過程以外とは別に斷續的飛躍的なものがある。それはわれわれの直接經驗するところである。氷が融けて水に至る過程は連續的であつても、逆に水が氷に移るには飛躍が許されねばならない。それと等しく自轉車を無限に連續的に累積して行つても自動車なる新範疇は思考し得ず、マニマファクトリアに組織せられた織機を連續的に増置して行くだけでは吾々は決してファクトリー・システムに到達し得ないであらう。生産物に於て

も生産方法に於ても斯かる飛躍がある。かゝるものこそ發展の本来の姿ではないか。然らばこのわれわれの日常の體験に對して經濟者の平等能力の假定は如何なる説明を與へるか。

答は極めて簡單に爲されてゐる。經濟に飛躍なし、飛躍的なものが若し存するならば、それは經濟の外に求められ經濟は單に之れに適應、順應するに過ぎないとせられるのである。例へばジョン・スチュアート・ミルにとつては「社會の進歩」が先づ行はれて、夫れが「生産及び分配に及ぼす影響」が考慮せられる⁽³⁾。能動的なものは經濟の外に成立し、經濟は受動的に影響せられて變化するのである。斯くて變化はおよそ飛躍的なものと然らざるとを問はず、外にあり經濟に對しては與へられたもの、既知のものとして臨み、從つて經濟者は單純に之れに適應して行くに過ぎない。さうして茲でも亦其の限りで今迄のまゝの能力に何等の興味をも加へるを要しない。飛躍的な變化を招來する能力は斯くして經濟の内では見られず從つて經濟學の質問の對象とはならない。斯くて茲でも平等能力の假定そのものを捨てるを要しないのである。否、進んで云ふならば、平等能力の假定の限りに於ては經濟の飛躍的發展は之れを説き得ないで、發展の由つて來る所以を經濟の外に求めざるを得ないであらう。由來正統學派を通じて經濟の發展は經濟の環境の變化に歸せられたのであつた⁽⁴⁾。かゝる環境説 (Milieu-theorie) はまた平等能力の假定が齎らざるを得ない理論的歸結であらう。

註 茲で讀者がマーシャルの愛好した motto 「自然は飛躍せず」 (Natura non facit saltum) を想起せられたい。文字通りに云ふときマーシャルに於ては單に經濟のみが飛躍しなかつた許りではなかつたのである。

尙ほ茲でわがしが學生時代より懐いてゐる一つの幼稚なる疑問を記したい。マーシャルは『經濟原論』の開巻劈頭で云つて經濟者としての農民

ある。「經濟學は日常のロジスム (Ordinary business of life) に於ける人類の研究である」と。わたしは何故に經濟學の研究が斯く ordinary の範圍に限定せられたのであるかを知らなう。 extraordinary business of life は何故に經濟學研究の對象とならぬのであらうか。夫れは云ふ迄もなく、經濟の攪亂、動搖に外ならぬものであつて、經濟發展の齎らすところのものである。マーシヤルの經濟學の定義そのものが既に經濟の飛躍的發展と云ふ ordinary でない經濟現象を研究の外に放逐してゐると考へざるを得なうものである。またマーシヤルが「代表的企業」と概念したものは彼の長期觀察の上に立つた正常状態に安當するものである。さうして此の場合の normal の状態は上に述べた ordinary と呼應するものの如くに考へられる。わたしは茲る處で abnormal の状態は短期觀察と等しく無視せらるべきものではなく、夫れは例へば恐慌の如きを指すと爲し得よう。(5)

(1) A. Smith, *Wealth, Cannan's ed.* Vol. I, p. 17.

(2) Marshall, p. 248, *Changes in industrial structure must wait on the development of man; and therefore must be either gradual or unstable.*

(3) J. S. Mill, *Principles*, Book IV.

(4) J. Schumpeter, *Wirtschaftliche Entwicklung* I. Aufl. Kap. 7.

(5) ロジスム (『前掲』) によるとマーシヤルの『經濟學原論』第一版では「代表的企業」なる語は存しないと云ふことである。

四 經濟者の二(多)元性

以上われわれは平等能力の假定から歸結せられ得る問題の若干に就いて論じてきた。さうして均衡理論に關する限り夫處に何等の異論なきを知つたし、また經濟變化に關する連續性の理論と發展の環境説とが生れる所以を知り得た。ここでわれわれは再びわれわれの直接經驗する經濟の世界にもどつて、既存の認識の成果を反省して見るの要があ

るのを覚える。先づわれわれの経験するところでは先きに示した比喩を藉るれ、水から水への變化の如き經濟の發展現象が屢々なのを知つてゐる。マニファクチャーからファクトリー・システムへの如き、或は全く新しき生産方法の實行の如き、新生産物の生産の如きが然りである。近世に至つて屢々生じた「産業革命」の過程には常に事物の飛躍的經過が含まれてゐる、夫れは單純なる連續的變化や生長の過程に還元し得ないものであることを端的に告げる。さうして正に斯かる飛躍が他のものに還元、解消せられないで飛躍の形で把握せられねばならない。第二に斯かる飛躍が常に必ずしも、否、逆に多くの場合に、經濟の外から生起して經濟は單に之れに適應するのではなくして、寧ろ經濟者の經濟行動そのものとして行はれてゐることを経験してゐる。換言すれば、斯かる經驗に妥當ならんとするならば經濟者自らによる經濟發展の内發性に思ひを至さざるわけにはゆかない。

まさにわれわれの斯かる經濟經驗の地盤から經濟者の平等能力の假定に對しての反省と批判とが爲されねばならない。平等能力なる一元的構造から諸經濟者の不平等能力なる二(多)元的構造に至らざるを得ないのである。

經濟の變化が斷續的、飛躍的な部分を含み然も斯かる變化が經濟の中から内發して來る限り、それは飽くまでも經濟者の活動の生むところと云はねばならない。經濟者は飛躍の能力を持つと爲さねばならない。さうしてわれわれの經驗の教へるところに従へば、斯かる飛躍は經濟生活のあらゆる部門に跨つて同時に成立し得るものではなくして、常に何等かの起點をもつものである。それは全面的、平等分散的のものではない。斯様にして經濟者のあるものが他の多くの經濟者に擢んで正に飛躍の起點を創造するものなることを知るのである。一度び飛躍が經濟過程の何處かで、何人かによつて、成立せしめられて起點となるとき、その後續過程としては此の飛躍が他の經濟者に對して既知の

もの、實驗すみのもの、模倣せらるべきものとして現れる。其の限りでは後續者に對しては適應のみが要求せられて、一度び起點を作つた新たなものが一般化し普及することと爲る。若し此の場合に長期の觀察が試みられるときには人々は飛躍の起點でなくして飛躍の普及した新状態のみが見られるであらう。しかし乍ら起點の成立と普及の徑路とは全く區別せられるべき問題であつて、此の場合には長期でなくして短期の觀察のみが此の區別を明瞭になし得るであらう。

飛躍と云ふ創造の能力は追隨、模倣のための能力とは本來的な差異をもつ。兩者が相互に代替性を持ち得ないことは増加せしめられた自轉車と新しく創られた自動車とが代替性をもたないのと同様である。斯様にしてわれわれは發展問題を描へるとき經濟者の事物處理能力の二(多)元性を定立せざるを得ない。少くとも一は即ち發展創造者、他は發展追隨者の二範疇、二典型之である。兩者は相互代替性を有せざる限りに於て經濟者の不平等能力(Heterogeneity of managerial ability)を示すものであり、また正に現實に於ける此の二元性がそのまゝの形に於て發展過程の説明要具にとり入れられるのである。

註 經濟學の歴史に於て諸經濟者の不平等能力、相互非代替的性質を經濟の過程自體にとり入れたのは、一人はマルクス(プロレタリアとブルジョアジー)であり、他の一人はシュムペーター(「企業者」と「單なる業主」)である。茲に詳しく説かない。

茲で起り得べき誤解に對して豫め注意して置きたい一點がある。それはわれわれが「能力」を云ふとき經濟者に生得の、固有の能力を意味しない點である。それはむしろ機能的(Functional)の能力である。われわれが發展創造能力と云ふのは或る經濟者が單に發展を創造した限りに於ての其の能力を指すものであつて、彼は爾後は他の經濟發展創

造者によつて捲き起こされた發展現象の追隨者たることを毫も否定するものではない。否、經濟發展の過程を知るものは斯かる創造能力がむしろ一經濟者に一回限りのものであることが常例なのを知るであらう。その意味から云つても創造能力は一經濟者にとつて長期的繼續的なものではない。夫れは極めて短期間のものである、恒常性をもつものではない。マーシャルの「代表的生産者」はマーシャル自らも云ふやうに長期觀察の要具であつたが、發展創造者たり得るのは短期的のものたるを知るとき、夫れはその限りでは決して他の「代表的」なものたるを得ない獨自のものと解釋せざるを得ない。

靜態經濟に於ては一元的な平等能力の經濟者のみが充満してゐる。然るに發展過程の中では多數經濟者が能力の相違の形で少くとも二つの典型に分化せしめられて來ることとなる。さうして斯様な能力の分化は特定經濟者に固有なものではなくて發展の行はれる限り寧ろ *ad hoc* に現はれて來るところである。發展なき限り其の區別は消滅し、また斯かる分化が認識し得ない限り發展現象は認識出來ない。斯様にして經濟の靜止狀態が經濟發展の一つの特殊なる場合たるやうに經濟者の平等能力の假定は經濟者の能力の分化の事實の一つの極限の場合であると解し得るであらう。

五 半生産者としての日本農民

以上の一般的考察から進んで日本の農民が經濟者として如何なる性格をもつてゐるかを明かにしたい。

經濟生活が年々歳々同一狀態を反覆してゐる限りに於ては——乃至は自由競争をやり盡した狀態に於ては——特に經濟者の處理能力に就いて特別に新たなる質問を爲すべき何等の機縁もないことは既に述べた。一見したところ我が

經濟者としての農民

國の農民は徳川時代の昔より今日に至る迄、何等の變りなく舊態依然としたるものがある。事柄がその限りに於ては彼等の經濟事物の處理能力に對して何等の反問も必要ではなく、之れを taken for granted 與へられたものとして十分である觀がある。然し乍ら夫れは單なる外觀であつて事柄の内容には顯著なる變化がある。それは云ふ迄もなく農民が置かれてゐる經濟の四周の變化、換言すれば農民の經濟的位置の變化である。彼等の相接する市場關係が激變して、農産物市場も農業用具及び農民生活品市場の關係が益々資本主義的性質を強化して來た。斯かる變化が敢て農民の處理能力を新たに質問の對象化せしむる契機となる。

恙うである。第一、農民の在來の生産の規模に於て何等の變りも顯著には認め得ないが彼等が市場と結ぶ關係は斯かる規模のまゝでは均整のとれないものとなつた。小農民は小市場、小消費者、小工業者と相互に均整し合ふ。然るに今日の大市場は其の取引の單位數量から云つても個々の農民の生産數量、需要數量よりも遙かに大量を必要とする。例へば小市場に年産額二十五俵を販賣する小農民は、今やそのまゝでは大市場に直接参加し難い。また夫れ故に其の限りに於ては此の單位取引數量以下の小量は洵の意味では商品たることが出來ない半途半端物件であると云はざるを得ない。洵の意味で生産者たるべき十分の要素をもつものではない。斯様な意味に於て個々の日本農民の大部分は、今日の資本主義的市場關係に照應した經濟事物の處理能力に於て甚だしく缺けると云はねばならない。わたしは此の文に於て經濟者の能力を二つの典型に分ちて創造者型と模倣者型に分つたが、茲で農民の場合には抑如何なる典型に屬するかを問ふ前に、抑々彼等が「經濟者」であるか否かを問はねばならない。さうして其の答へは明かである。彼等は經濟者としては未だ不完全で成熟したものでないと云ふことが出来る。假りに斯かるものを

「不完全生産者」或は「半生産者」(Halb-produzent)と名づけよう。

第二、それ故に日本の資本主義經濟の進行に照應して常に問題となることは、この半生産者の大群を生産者——即ち完全生産者——たらしめることの努力に集中してゐたと云つても過言ではない。個々の半生産者が抑々其の生産の規模を擴大して今日の市場關係に適應して其の半途性、半端性を脱却する途は閉鎖されることが強いのであるから、従つて別個の操作を通じて「完全生産者性」(假りに Volproduzentenschaft)の創設が行はれた。それは云ふ迄もなく、個々の小農民の協同組合(例へば産業組合、部落組合、農家小組合等)之れであつて、この主として流通過程を擔當してゐる組合が、個々の半生産者に代替して完全生産者として市場關係に参加することとなつたのである。われわれは之等の協同組合に於て始めて洵の意味での生産者、生産單位を云爲し得る可能性をもつのである。さうして此の段階に於て始めて他産業の生産者と同一水準を漸く保持し得、そこで始めて「代表的生産者」に就いての論議を交換し得ると云はねばならない。

第三、さて然らば斯くして得られた「完全生産者性」は、上述したわれわれの經濟者の二範疇に照らして如何なる位置を與へらるべきであらうか。經濟(この場合には農業)の發展過程に於て此の「完全生産者性」は如何なる役割をもつてあらうか。

「イ」茲で斯かる「完全生産者性」の創設せられなかつた以前の「半生産者」の段階に於ける農民が農業發展に於てもつてゐた役割に就いて反省して見たい。斯かる段階の農民は農業發展として具體化さるべき要因に對して自發的に接近すべき何等の能力も持つてはゐない。彼等は科學の成果に對しては勿論縁遠かつたが、それよりも更に重要な

ことは假令縁遠くなくとも之れを自らのイニシアチヴに於て自らの農業にとり入れるべき何等の創意力も資力も之れを持つてはゐなかつた。それは日本の農業史が明瞭に示すところであつた。若しも何等かの發展現象があつたとするならば、夫れは農民以外——日本の場合には例へば農産物商人、農産物加工者、尙ほ之れに或る段階に於て地主をも附加し得よう——の徳憑、創意並びに資力とによるものが多かつたのである。殊に政府の演じた役割は大きかつた。

註 嘗て大槻正男教授（『農業經濟の基本問題』昭和十二年）は「地主は農業者なりや」と云ふ興味深き質問を提示し、地主が米作農業に於ける危険負擔の役割から漸次離脱して行く點を把へて、右の質問に否定的答を與へられた。わたしは此の論旨に賛成である。それと共に之れに困んで教授に質問したい「抑も何人が完全農業者であるか」と。

〔ロ〕 斯様な事態の下に於て「完全生産者性」の創設を目標とした農民の協同組合運動自體を創つたこと自身がまた一の農業發展の顯著なる事例でもあつた。しかし此の運動自體も亦わが農民の創意によつて其の中から内發的に成立したものではない。特に政府の演じた重大なる創意、援助によつたのである。茲に詳しくは説かない。

わが國の産業組合論者の中には此の産業組合運動成立の由來を今日に於ても依然として重要視し、産業組合の設立そのものを以て發展現象と爲すものがある。單純に農業のみを眺めたならば「半生産者」に「完全生産者性」を賦與することは左様であらう。けれども今日の全經濟社會の中に農業を据えて見るときには直ちに之れを其の儘主張することが出来ない。經濟發展——從つて今日の全經濟社會の中に於ける農業の發展——は洵の意味で「半生産者」の問題ではなく悉くが完全生産者に關する問題なのである。農民を變じて産業組合によりて「完全生産者性」を創設する

ことは、それ故に發展の地盤（即ち發展創造者を生み得る地盤）を創設することであつても、發展そのものを生むことでは決してない。今日の全經濟社會に照應して云ふならば「完全生産者性」の創設ではなくして、既に創設せられた産業組合が何を爲すかに發展過程に於ける地位が懸るのである。

〔ハ〕 斯くしてわれわれは今日の農民の多數の協同組合が果して何を爲しつゝあるかを問はねばならない。洵に協同組合の營みつゝある仕事は多種多様である。しかし其の仕事の多くが既にわれわれの說いた意味で農業の連續的變化の範疇に屬する機能に屬してゐるの事態を見ないであらうか。其の役割の數量的増大はあつた。また新たな役割の増加があつた。けれども其の重點とすべきは既に他が演じた役割を自己に奪つた形態を出でないものが多くはないであらうか。即ちマーシャルの森の中で生長しつゝある樹木に過ぎなく其の傍らに枯死する樹木を眺めつゝあるに譬へらるべきものではないであらうか（人はこの場合に反産運動の存在を考ふべきであらう）。茲に疑問なきを得ない。少くとも全經濟社會に就いて觀察するときに、わが國の協同組合運動の中から、洵の意味で經濟發展の創造者的役割を演ずるものが輩出しつゝあるとは云ひ得ないであらう。それは今日のところ追隨者型によつて一色化したものと概括出來得るであらう。そこには經濟者としての一色性しか認められない。

第四、それは何故であらうか。わたしは其の由つて來る所以の最も重要なものとして協同組合運動の組織の缺陷を挙げたい。既に述べたやうに夫れは「完全生産者性」を單純に流通過程に於て創設しつゝあるに過ぎなく、半生産者たる多數の農民の生産様式そのものを依然として舊態に放置しつゝあるからである。勿論農業の機械化等を通じて部分的には生産過程の「完全生産者性」が行はれつゝあることは事實であるけれども、夫れは畢竟するに大群の半生産

者の大海に於ける孤島の域を脱するものではない。その意味に於て「完全生産者性」は協同組合を通じては單に部分的にしか未だ以て實現せられてゐるに過ぎないのである。小農民の農業生産過程に依然として半生産者の側面として取殘されてある。協同組合の悩みは茲にあり且つ彼等が經濟發展現象の最も根源的なる生産方法の改變過程に於て直接に何等の創意をも發揮し得ない所以がある。

×

×

×

わたしは今日の狀態に於て經濟者としての農民は以上の如き地位にあると思ふ。それ自らは今日の大市場關係に於て半生産者であるけれども、夫れは協同組合運動によつて完全生産者に一步の近接力をもつ。然もそれは極めて部分的にしか即ち流通過程に於てしか實現せられてゐない。従つて協同組合運動は事實としても或はその組織としても其處に農業に於て最も根源的な經濟發展の創造者型のものを生むに至る契機を有しないのである。——まさに斯くの如きが今日の日本經濟再編成の悩みの前夜に於ける實狀であつた。再編成は此の場合に農業に於ける經濟主體に對して如何なる形を通じて行はれるのであらうか。それはわたしの茲に答へ得ないところに屬する。